

原発事故から15年、「消えゆく風景」に「ふるさと」を探して――

農文協
2026
写真絵本

原発災害は今も それでも「ふるさと」

豊田直巳 写真・文

全3巻 全巻揃 8,250 円(税込) 各巻 2,750 円(税込) AB判/各32頁 978-4-540-25150-4

きのうまで家族いっしょに暮らし、あそび、学び、働いていた「ふるさと」を、突然、放射能によって追われたら。そこにあるのに帰れないとしたら。そしてそれが、わたしたちの暮らしと深くかかわる電気をつくる原発がもたらしたものだとしたら。原発災害をどう記憶し、どう生きるかを、全世代に問いかける写真絵本シリーズ。



まなびや 消えた学び舎 変わりゆくまち

山・川・里・海がつながる自然豊かな浪江町。そこにあった小学校は東日本大震災と原発災害によって、すべて閉じられ次々と解体、家や店も消えていく。その現実と向き合う卒業生やまちの人々の、思いや願いを伝える。

著者紹介

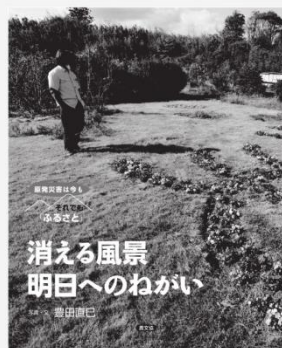
豊田直巳 (とよだ なおみ)

フォトジャーナリスト。1956年、静岡県に生まれる。長年にわたり、イラクやパレスチナなどの紛争地で取材を続けてきた。劣化ウラン弾問題やチェルノブイリの取材経験をもち、東日本大震災後は福島を中心に取材活動を継続し、映画製作にも取り組む。『それでも「ふるさと」全3巻』(農文協)で第66回(2019年)産経児童出版文化賞[大賞]受賞。



帰れない山里 消えゆくわが家

豊かな山の幸に生かされた山里、浪江町津島。山向こうの原発から放射性物質が降り注いだこの地は、「帰還困難区域」に指定され、「100年は帰れない」とまで告げられる。無念にもわが家を解体せざるを得なかった人々の思い、そして山里の風景や歴史、伝統芸能を記録する取り組みを伝える。



消える風景 明日へのねがい

原発事故によってすべての人が避難し、無人の町になった大熊町や双葉町。その土地で生まれ育った人たちは、「福島の『復興』のため」と自分に言い聞かせ、30年後には返してもらおうという約束をして、土地を「中間貯蔵施設」に提供しました。「いつか、もう一度、田畑を耕したい」という願いをこめて。



農文協

(一社) 農山漁村文化協会 〒335-0022 埼玉県戸田市上戸田 2-2-2
TEL.048-233-9339 FAX.048-299-2812

シリーズの
既刊情報は
こちらから▶▶

